



腑に落ちた「夏の思い出」

エプロン通信員 神賀 郷子

長男坊の初の夏休みを迎えた我が家の今年のイベントは、やんばるでのキャンプでした。早朝の森から響くキツツキの音や、コオロギの大合唱だった夜。雨の晩にはカエルの大合唱もきくことができました。川遊びをした奥間川には、たくさんのエビやカニが悠々と川底を歩いていて、やんばるの自然の豊かさを実感しました。

しかし、最も印象に残ったのは食事の仕度であった気がします。ご飯を炊くにもお味噌汁をつくるにも火が必要になる訳ですが、その火をおこすのが大変でした。火おこしを担当してくれたパートナーは、まさに悪戦苦闘。連日の雨に森はしっとり潤い、おかげで落ち葉になかなか火がつかえません。ようやく燃えたと思ったら、その煙の凄いこと凄いこと。その後、順調に小枝、中枝、大枝と続いてくれたらしいのですが、瞬間的にワッと燃え上がったのも灰が残るばかり。それでも空気の通り道を作るためにいろいろ組み方を変えてみたり、懸命に火を吹いてみたり、執念深く挑戦し続けるうちに、どうにか木炭にも火がつかえました。シューシューと音が聞こえてきそうな炭色の鮮やかだったこと！これでようやくご飯が食べられるという安心感！

回を追うごとに火おこしが上手になっていったパートナーですが、一度おこした炭がはからずも消えてしまった時、ある昔話

の一場面を思い出したといえます。その昔話の中の若いお嫁さんは、夜中も火種を守らなければなりません。しかし、昼間の疲れでうとうととしてしまい、ふと気付くと種火が消えているのです。姑になんと言われるかと必死で灰の中をかき回して探しますが、火箸は空をつかむばかり。意を決した若いお嫁さんは種火を求めて化け物がさまよい歩く夜の森に足を踏み出すのです。

キャンプはちようどお盆のウンケーの日でした。ささやかな迎え火を初めて焚きました。パートナー曰く、ともすれば頭でかちで知識に偏りすぎな我々と、遠い時代を生きた名も知らぬ先祖の間をこのキャンプは埋めてくれた気がする…。火おこしを担当した彼にとって、文字通り、腑に落ちた鮮やかな体験であったようです。



茶 びわわーゆんだく 53

読書の秋は「市報ぎのわん」で！

あなたが手に取っている「市報ぎのわん」いつから始まったか知っていますか？

実は一九五七(昭和三十二年)生まれ五十一歳です。今回は市報ぎのわんの成長物語について紹介します。

創刊号は「村報宜野湾」この頃宜野湾市はまだ村でした記事村報発行にあたってはよると、従来のように唯耳できくだけでなく眼を通して知らし合うために村報を作ることにしたようです。タイトルの字面も緊張して硬い感じですが次の六号では「宜野湾」↓ぎのわん↓バックには宜野湾のシンボル並松が描かれやわらかくなりました(次の号(七号)ではさらに並松が増えています。またタイトル自体も「宜野湾村報」↓「広報宜野湾」↓「市報宜野湾」と時期によって変化していつています。市制〇周年記念など節目の際に変更している事が多いようです。現在の市報に至るまでタイトル一つにしても色んな工夫を経て

いるのですね。紙面だけでなく中の記事から



(左から、創刊号、六号、七号)

もその時々空気が伝わってきます。例えば一九七(昭和四十六)年一三〇号の記事「宜野湾市が市町村合併する」という記事なので「十一月一日から新しい市に」ととても具体的な見出しがついていました。ここまで決まっていたのに、なんで流れたの？

続きは「市報ぎのわん縮刷版」で実際に読んでみては…(図書館・市立博物館などにあります)読書の秋は「市報ぎのわん」で！

宜野湾市史への問い合わせ
教育委員会文化課 〇八九三―四四三〇